



氷の上は安全+第一

南極では氷の上を移動するとき、目印になるものはありません。島にある昭和基地から離れると、あたり一面海氷しか見えないのです。目的地に向けて安全に移動するための目印を作っていく「ルート工作」という作業を行います。

ルート工作とは？

大陸や島に接した海には「定着氷」とよばれる平坦な海氷ができます。定着氷には、幅数cm～1mほどの割れ目（クラック）ができます。南極の昭和基地は東オングル島に位置するため、野外の観測に出かける際にはクラックのある、こおった海の上を移動することになります。

安全確保のため、事前に海氷の厚さを測り、数百メートル毎に目印の旗を立て、旗の位置をGPSで測定し、旗と旗の間の方角と距離を測り、ルートを少しずつのばしていきます。この一連の作業を「ルート工作」といいます。

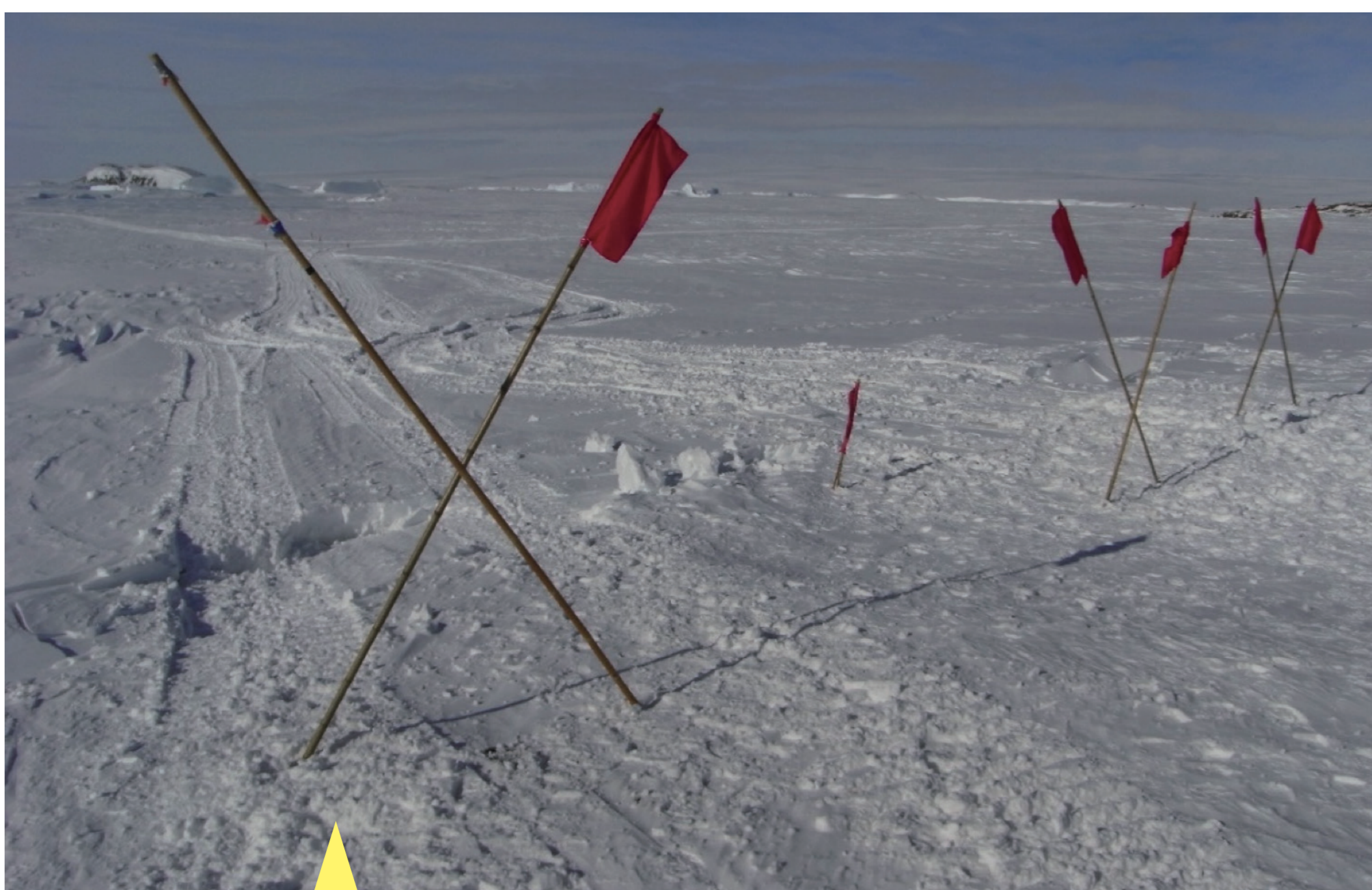
越冬隊が活動する海氷上のルートは、総延長が約200km。半年以上かけてこつこつとルートを作り上げていきます。



海氷の割れ目や障害物の有無を確認しながら、スノーモービルで慎重に進みます。



海氷に穴をあけ、厚さをはかり安全を確かめます。



危険なクラックには旗を×印に立てて目印にします。



旗と旗の間の方角と距離をはかり「ルート方位表」をつくります。

クレバスには気をつけて！

大陸の沿岸部や山岳地域では、氷河の流れが場所によって異なるために、氷床や氷河などの表面にできる氷の割れ目を「クレバス」といいます。割れ目に雪が積もると見つけにくく、とても危険です。発見された危険なクレバスには、離れたところからもその位置がわかるように赤い旗を立てます。

昭和基地では毎年、本格的な野外観測が始まる前に、万が一にそなえてクレバスからの脱出方法などのレスキュー訓練を行っています。



【昭和基地でのレスキュー訓練の様子】